

第3回国連防災世界会議パブリック・フォーラム
「防災における女性のリーダーシップ」
有村大臣挨拶

(2015年3月15日 於：エル・パーク仙台)

皆様、こんにちは。海外のゲストの皆様も、ようこそはるばる日本へお越しくださいました。心から歓迎申し上げたいと存じます。

男女共同参画担当、女性活躍担当大臣の有村治子でございます。

本日は、国連開発計画と仙台市が主催の「防災における女性のリーダーシップ」にお招きいただきましてありがとうございます。会議の開催に御尽力された、クラーク総裁、奥山市長を始めとする関係者の皆様、また仙台の市民の皆様にも心からの感謝と敬意を申し上げます。

「すべての女性が輝く社会」の実現は、安倍内閣の最重要課題の一つです。女性は、社会のあらゆる分野で、重要な役割を担っています。防災・復興においても、女性のリーダーシップが成功の鍵を握っています。

ちょうど4年前、2011年3月の東日本大震災では、ここ仙台を始め、被災地において、一人ひとりの女性が、救助・救援、医療、消火活動はもちろんのこと、その後の復旧・復興における担い手となりました。救援に当たる女性自衛官、避難所を回る女性警察官、災害支援ナースなど、多くの女性が専門的知識を活かして公益のために活躍しました。同じ女性として心から誇りに思います。その崇高な貢献を皆様と共に改めて称えたいと思います。

一方で、例えば、避難所の運営に女性の視点が欠如していたために、女性更衣室や授乳室が用意できず、女性が避難生活に困難を覚えたケースもありました。

避難所に設置された仮設トイレが、男女の別になっていなかったり、不衛生であるために、女性がその利用を我慢して健康被害を生じたという報告も各地で聞かれる現実となりました。

災害が起きる前に女性の視点を反映した準備がしっかりとできていれば、大災害発生時にも、女性にとって少しは安心感のある、よりましな環境をつくれたのではないかと、という教訓も残ります。

厳しい現実を目の当たりにしたこれらの経験を踏まえ、日本では、地域防災計画の指針となる防災基本計画を修正し、女性の参画拡大や男女共同参画の視点を明記しました。

さらに、男女のニーズの違い、あるいは子育て家庭などのニーズに配慮して物資を備蓄しておくことや、避難所の開設当初から、授乳室や男女別のトイレ、更衣室、物干し場を設けること、復興計画の作成に際しては、政策・方針決定への女性の参画を拡大することなど、男女の尊厳にかかわる極めて大事な実践的原則を打ち出すことができました。

自然災害に国境はありません。生死を直視する大災害の混乱の中で、日本が経験的に学び出した教訓を、各国で役立てていただくよう、国際社会にも共有をしてきました。男女共同参画の視点からの災害対応について、国際会議の場で英文の資料を配布してまいりました。海外のゲストの皆様、ご関心を持っていただければ、ぜひこの小冊子を読んでいただきたいと思います。日本が厳しい中で経験した災害時での具体的な知見を英文にして、そのヒントを世界に共有したいという考え、これは、人々の生存可能性を世界レベルで高めたいという、日本国民の強い意志の現れでございます。

昨年3月の国連婦人の地位委員会において、我が国から、災害対応のあらゆるレベルにおける女性のリーダーシップを促進する決議を提案させていただきました。多くの国々の賛同を得て、国連で採択されたことは、大変ありがたいことだと思います。

女性は、防災・復興の重要な担い手です。

防災・復興において女性の視点がより活かされることは、家族の健康や安定に直結し、地域の安全・安心につながり、国々の活力になっていきます。

政府、自治体、NGO、民間セクター、市民と、それぞれの立場で、災害から回復する力、レジリエンス、粘り強い強靭性を持つ持続可能な社会をつくるには、女性がエンジンになること、またその任を担う知恵や力や優しさを私達女性が持っていることを皆様と確認し、私の開会の御挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。